

『大作曲家はどこから来てどこへ行ったか（2）：ドビュッシー』

伊藤美由紀（2400字）

今回の特集テーマにおいて、前半はドビュッシーが誰から、どこから影響を受け、どのように独自の音楽世界を切り開いていったかを考え、後半は、彼の音楽が、後世にどのような影響を与えたかについてまとめてみる。

まず前半のドビュッシーが受けた影響について、年代順に追ってみたい。幼少時代は、貧困な生活環境で、両親も芸術とは関わっておらず、まともな初等教育を受ける機会や、芸術的な音楽を聴く機会が全くなかったにも関わらず、フランス人の子供が誰でも知っている子守唄や、遊び歌の旋律に愛着をもち続け、いくつかのものは、後に自分の作品のなかに取り入れたりしている。幼年時の音楽以外の関心事として、色彩の鮮やかな蝶の収集や、部屋を小さな美しい装飾品や絵画などで飾ったりすることを好んだそうで、画家になりたかったとも言われている。幼年時代から美しい色彩に自然にひかれていった嗜好は、後の音楽家としての彼の色彩的な音色の幅に影響している。その頃、カンヌに住んでいた親戚を度々訪れており、海のある景観、薔薇の咲き誇るアンティープの街道について、後年に回想しており、幼年時代の生活の中で、貧乏でありながらも、内面的に豊かで既に繊細な感性を発揮し、当時、自分の目、耳、体で経験し感じたことは、音楽家になってからも影響を与え続け、彼の真髄として残り続けていたのではないか。その後、偶然にピアノのレッスンを受けて、素質を認められて、数ヶ月でパリ音楽院を受験し、10歳で入学の許可を得たのである。ピアニストとして技量を伸ばしている時代には、バッハ、モーツァルト、ショパンに特に関心を抱き、作曲家になってからも彼らを崇拜し、彼の作品に多大な影響を与えている。後に、創造的制作を極める作曲の道に転向するものの、ピアノという楽器は、彼の作品において、生涯大きな位置を占めた。自分がピアニストであったからこそ、ペダルの使用には細心の注意を払い、最後の倍音が消えるまで残響に耳を傾け、自分の耳で聴いて判断するということを常に大切にしていた。ピアノの残響からの影響からか、初期の作品から、音が段々とゆっくり消えるように終わるという構成を好んでいる。

彼の20代の作品は、ピアノ作品と声楽作品が中心であり、メック夫人のピアノ伴奏者となり、ヨーロッパ各国への演奏旅行に付き添ったり、モロー＝サンティ夫人の歌唱塾の伴奏者をつとめアマチュアのソプラノ歌手であるヴァニエ

夫人に出会った経験は、作曲家としての成長に大きな影響を与えた。演奏旅行中、ウィーンでは、ヴァグナーの《トリスタンとイゾルデ》などの公演を聴く機会に恵まれ、深く感銘を受け、後の彼の作曲活動に大きく影響を与えた。ヴァグナーの音楽に傾倒していたものの、彼の音楽語法には批判的であり、彼の音楽を超えるものの創造をめざしたのである。一方、ヴァニエ夫人の声は、高音域のソプラノで、歌唱力もあったようで、彼の声楽作品に対する創作意欲を刺激し、たくさんの挑戦的な作品を書いている。また、ヴァニエ夫妻の支援のもとに、ヴァニエ家のピアノで作曲をし、本棚の様々な本、詩や辞書を読み尽くし、初等教育を受けられなかったかわりに独学で文学的教養を身につけていった。特に習作期は、女声とピアノの為の歌曲作品が中心となり、後の彼の独自の音楽語法を確立する重要な時期であった。象徴派の詩人たちからは、多大な影響を受けており、70曲以上に上る歌曲は、ヴェルレーヌ、ボードレー、マラルメらの詩による。象徴的なイメージに置き換えて、複雑多様な響きを言葉に託す彼らの詩は、美学的観点から、ドビュッシーの歌曲、音楽語法に大きな影響を与えている。30歳の時に着手し始め、不朽の傑作となった《牧神の午後への前奏曲》(1894)は、マラルメの同名の詩に触発されて作曲したものである。美しい詩を自由に絵解きしたものであると本人は述べており、マラルメ自身も音楽の美しさを絶賛している。「現代音楽は、この曲とともに目覚めた。」と、ブーレーズに賞讃されてもいる。詩の言葉を超越して、独自の語法により音として結晶化されている。

次にドビュッシーの音楽からの後世への影響面について述べる。最後に取り上げた《牧神の午後への前奏曲》は、ラヴェルにより、2台ピアノ用に編曲(1910)された。この作品に対して、バレエ・リュスの主宰者のディアギレフは、バレエ制作をニジンスキーに提案した。バレエの筋書きは、マラルメの同名の詩に基づいており、モダン・バレエの最初とも言える作品である。露骨な性的表現もあったこともあり、初演(1912)は、物議を醸し出したものの、新聞での批評を含めて話題になったこともあり、注目を大きくあび、年間に15回以上の上演がされ、チケットが完売になるほどの話題作品になった。また、ラヴェルは、この作品以外にも、《夜想曲》を2台ピアノ版に編曲、《サラバンド》を管弦楽に編曲している。ラヴェルは、ドビュッシーを尊敬、評価しており、自身の《弦楽四重奏曲》(1903)は、ドビュッシーの影響が見られ、ドビュッシー自身も作品について高く評価をしており、彼の初期の傑作となっている。ピアノ曲《水の

戯れ》(1901)も、ドビュッシーのピアノ曲《映像第1集》の《水の反映》(1905)と同時期に作曲され、リストの《エステ荘の噴水》から影響を受けておりよく比較される。また同年代の作曲家でドビュッシーと友好関係のあったサティは、《4つのささやかな歌》(1920)の1曲目《悲歌》を、ドビュッシーの追悼に捧げている。ドビュッシーに形式が欠けていると批判されて、フランス語で「まぬけ、だまされやすい人」という意味をもつ「梨」にかけた皮肉な題名のピアノの為の《梨の形をした3つの小曲》(1903)も書いている。他にも同時代の作曲家、メシアン、デュティユー、ブーレーズらを含んだ後世のフランス人作曲家はもちろんのこと、日本人作曲家としては武満徹を含み、世界中で現在に至るまで彼の音楽に影響を受けていないクラシック作曲家はいないといっても過言ではないだろう。他ジャンルでも、ジャズ、ポップス、BGM、映画音楽に至るまで多種多様な音楽に影響を与えている。和声法、管弦楽法ともに独自の音楽語法により、繊細で内面的な音楽世界を創造し、ドビュッシーは、後世への先駆者となったのである。